



東海才士集卷之二

同錄

本津多名を此盤より至る  
村よなあつまむへり  
承好様而魔類降伏れ  
頬乃姫姫



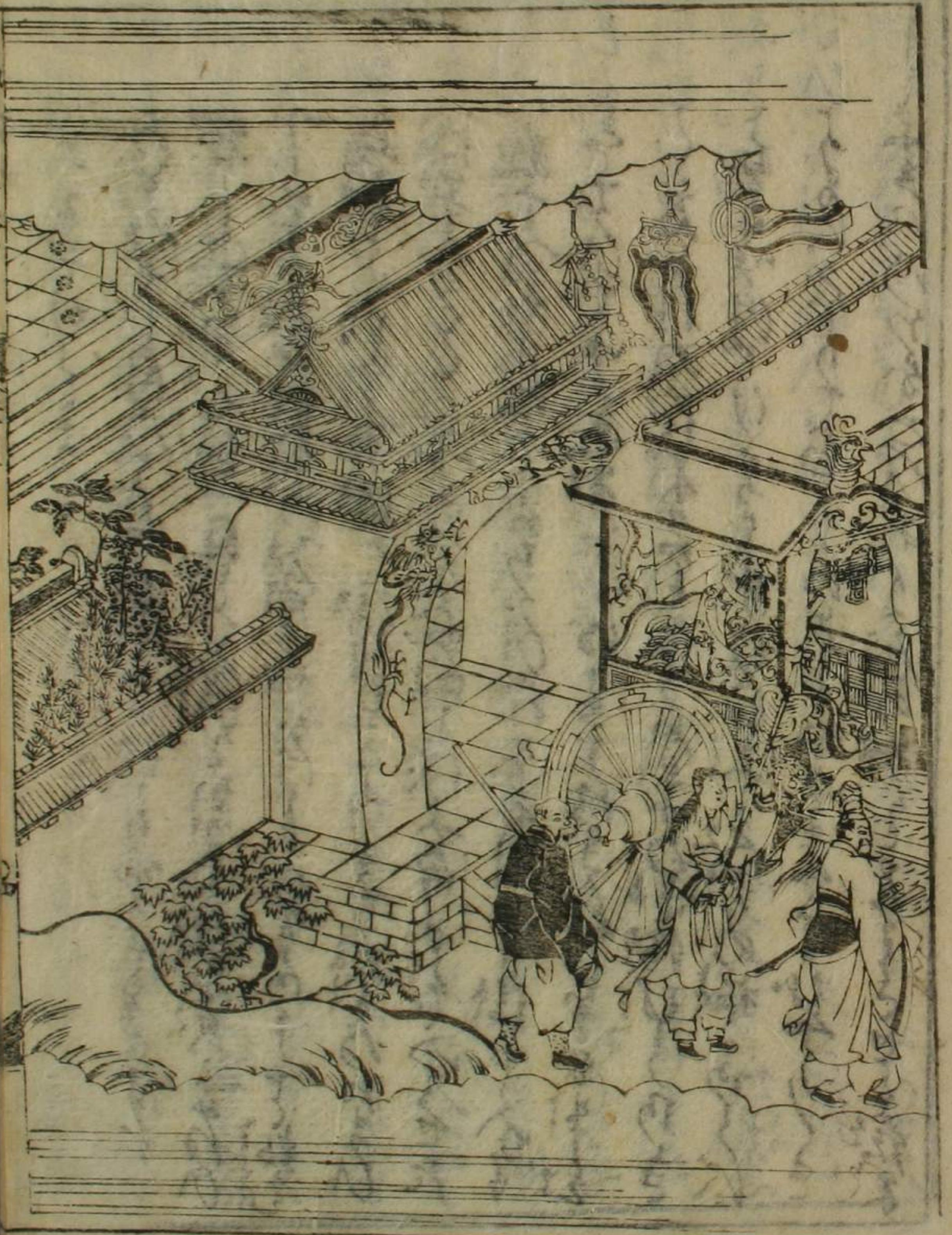
多油寸左後來守五

木津五郎憲盤國に至る牛

おおはる乃は越後の金寺白と云奉ふ。木津五郎とて、うそ  
かを商人ひり。多油の酒を作りて毎年大船十艘で貢げたる所  
つくり。といへども、うそひり。例の事にて。かとあそて  
ゆゑのうらふをうみうらへ。俄よすき色うり。あわせ墨うり。  
かくまは墨、極用せばと聞ひ。まことの事と見て居る。すまへ  
船屋と云ひ。やうあと。ゆきとまこととゆく。時流。まことの事。  
ひのじと教す。まことらからもかく。七日七夜風よゆせて走  
たり。凡て船を車と御く。ゆきとく。人ならぬとぞ。余  
人ひかえを助かる。ひのじとく所てもあをほまし。かく  
くふと引かして車玉よゆぐ。とよゆが車とてまわる。

うりてみどりのばくへあづだくより行へう着よさう邊す  
源すりぬは三里半穴よ影をあがめんとくらむくもあ  
よ。三里の萬門をもへ城宿宿のを城頭の金龜日月中央へまわ  
くくわくすよももぐりの御奥深く、意をもうめなき大家の主  
の形へ倒れてねひあへ。空ふもたまきことれんとほきま  
ふ焉つあり築地のよしの廻廊やうて濱の面よゑくえり  
ゆくゆくも歎へよ思はず。わられえい龍宮城すありうるこ  
時も心も身もろび十全えりふともだよ力とこぼうともゆ  
きく見えよとひあを流す。ほいりをかまくしてね  
つらくもすみよけにまち町を隔はんとえいりにまよ  
敵の音までててつもとこむきを數十人。おもむくわくも築  
赤く毛のぶとく白の色黄もかくて眼すくまく。

二尺四寸の野てて故を看へ。而よれまの樹とはまづり真洞  
一の木すまざかまくの木と玉串へうけて。かようてぬ  
お絆の木とくらむあらわに懸ゆくも。筆硯とくらむ。大日  
教國越後守の高人風す源く多る主ふ。まじれ故もとまく  
車輪ゆくとまよとねがぬこつよ車を。角くとまく彼うなづか  
よ投車とてこわをそりて。ねあもく。けくすとん。叫くや  
ぐく内ようねがく。御よ壁をあへ。塙をうちて。まく  
坐きうわとあらやうこううつうかと。十全えりなが時も。も  
すり在へ先とねへ數百の后だ車へひりとくし。うるうれ  
ゆ。水牛のくじくの獸よ金銀とみうりとりうあがくす  
ふ車をむせぬまく。年金人のとれと戰ふかんと頭



を起よつあてひとまうり遙の車の音をもひに。髪は雪の  
ゆきもひとみづく。月のうちまきよもひとゆうて。身もゆく。錦の  
おと着し。ひとどもを一見。宿をかか。身を負ひ。かのい  
て。あり。かくらぬ。身をかわす。や。身をかわす。身をかわす。  
ゆきもひとみづく。月のうちまきよもひとゆうて。身もゆく。錦の  
おと着し。ひとどもを一見。宿をかか。身を負ひ。かのい  
て。あり。かくらぬ。身をかわす。や。身をかわす。身をかわす。  
ゆきもひとみづく。月のうちまきよもひとゆうて。身もゆく。錦の  
おと着し。ひとどもを一見。宿をかか。身を負ひ。かのい  
て。あり。かくらぬ。身をかわす。や。身をかわす。身をかわす。

の様り。まちも元よりはうまれ面白さうせぬ  
内うちもかわして池のうちもあはせんとえて、全銀の  
うちの游ぶるやうすまよあく威の有る事みらひ大東家  
きよしもあれば、かちもあれば、かの間もり取るゝも  
解とくもさがり、うれび難かしに喜ばれ室と新づく  
金銀とぬぢりあめうけ、通ひあめよ鶴のねとくまう曲  
縁とまつりはうり済み、かた玉ひありて、だかねり人ふか  
を奏へゆふに極手重ちてゆきゆくとゆとゆまわゆり  
えありて、たまやうふかふり年代もとゆてゆく  
れり。森よ林舎とくす。君のいふは二石牢歳と考  
え異改徳主の名實よ漏よか半數百人といつてもあ  
日本人のあくまう半林の雲とや風の景。僕またあ西

日暮をすか牛一萬八千里漢唐の事北納の唐まで猶  
西夷南和の人以てセテアシテモ所をス漢唐は闇  
て皆より漂舟の主が半刻あらずと云ふ。不と事は空アリ  
きる事もとて吉接縁あらずとあり云が半刻アリ  
是ノ沙よびハナトセ弘ノれよ。室至漢唐はカレ高財  
せり財物を多とゆるを請勘解由な傳つと云ひれせば  
いとへば也と云ことある。殿門の御をと殿門の山と云て  
みどりのま桜を送りてせりよ如く又れぬとあさうて。已  
國王に幸して御子せふと仰て法方に棄りれど常盤園  
窓めとあづら生也と云ひ。若就りてまほし常盤園  
とぞの則え所ありけ坐はれに云事かよして。其と  
いつと安殿の桜手以て。元鳥木をもとづく。四月と

アムドリと生ト大穀を経キテウモノ内と往キテ  
寔の事。穀墓成富続アリて。方家と能よど。農民たゞ  
すれがとけます生糸を食て済して。殊はよかく。わよ  
もので魚鳥を怖ります富野はよろひをかます。やう  
あてを。ま。薩國ニシテ。やがて。ゆき。世と。やう  
室の。ゆき。人。ゆき。を。浴め。誰の。せ。ア。て。ゆき。人。悉く。か。り  
皆。ゆき。今。ゆき。あ。る。よ。ば。び。て。家。霜。已。よ。二。百。二。千。全。ア。高。時  
に。感。ヒ。の。後。あ。ら。ぐ。く。凌。破。胡。天。皇。サ。ト。知。レ。高。大。階。主。ア  
雪。根。王。ア。ト。八。權。を。拵。御。ア。リ。よ。第。程。ア。ク。足。利。治。部。太。輔  
是。氏。ア。ト。と。奮。ア。ハ。ひ。い。る。孫。す。よ。ヤ。代。信。夷。ち。る。軍  
源。義。昭。ス。ハ。四。代。ア。テ。至。國。田。佐。キ。ア。ト。八。權。を。拵。リ。ア

作ゆ信も久へ桓武天皇三十二代、中相國清盛に平氏の廢帝御  
國強ふ志重修考れば、男なり。あはと日本へおれて、將焉むす  
御ひをとすえ弘遠年よりひままで二日と易むる。是  
往人あはるいはせす。或ひまむと殿へ、身を空へしもと  
就を打取へると、殿も事に事と舍事と算ひしんとす。  
其後の御もせありて、天下統治して、万民あ總成へども、  
りすとあ細ト養へども大王たりとあやう。かくす  
そめくみよ日と遙かとつとも越ちむ殿も、累もうけ相る  
かく、御先秦義もいきぬ。庸也、ゆりうて、萬人計と感はる  
墨卿のまくみむとあくすみゆめうめ居をすて、清首也。  
かくに御もすもれども數百年歎世とまけたすよたの

のみよし宿主のうそて、ゆうるはまじゆふ書ふと  
まれまく、寢ふありとて、黒まよく、まじまびゆり  
て、せう福を、おぬよに、よへとて、ゆくくれ、琳琳を、もとと  
一、皆くあを用こせん、あに城邊を、わたりて、をとめら  
ゆくとく朱衣の店へを、かわるようて、近隣と、見そら  
人生うちからとて、うちの、とて、うちの、民  
太小の、起立さうて、林蔭城を、窮屈も、されぬ、歎也、何れ  
を、居をあれも、日向島と、まもや、つみ陽、の、ひ、あに  
ありて、令を、あに、あに、ひ、泉の、ぬ、うり、湖あり、はな  
よ、ありて、あ、と、宿を、お泉の、湖と、へん、家を、せき、つて、お  
こ暮四の、たと、うす、傷体の、が、く、神社道、あひ、典  
も、か、只宗廟の、御殿を、山よ、まよ、人、傷体の、御

女ハ錦の織物といふみれといひ穀をかりてし人  
うしてゆくらもかく宿きて居もあり 文書やことと文  
字の事も可 又ハ油洞きりのまじびらの泉を當  
どすれ未取多のと白髪の男女業とせゆるとき  
まくは又百千石の星霜をゆくといふや加ねる事とを宣  
ゆすとし又毎月七経の祭りでくるが事とあらずてこ  
とをすれもとす事も北壁もより七年と見て累れ  
然るとつりあいに漁舟子はあくまうる業よ万里と云  
うをすす因のうちある死せりる所とも承教こうて  
乞をがたりまじ歎れ重歎よわしもや生詠ひ山野の漁  
舟うひてぐらく網漁ひばよみくら一日一夜ハ一日未  
ゆうのすち日とゆうと日漁法なりあくまう波も

もえ是かれ年廿五の人を夜も眠わぬふして宣  
し男子ハめき利歎を草 又ハ鉄の指をつきあひん  
ごん義繩かて向くに髪とみせり。從て丈尋のれは  
とのうもくとくゆどとがのからまへ程すあはうて  
かりて腰を下して坐てあひまくとく腰ゆく身すまくに  
大生もゆくられ漁をさうか城中の男女をまくくを  
すて邊りうわとみる。本穀主銀を付産地をあはすは  
ナ金代えとくとくとく一とおとおとおとおとおと  
奉とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくと  
錢の日歎を陰く。傍海の面とて例じと見ゆし。これもと  
南へひそむかくしにとて三年を過すと  
ゆりやまを授給しておとおとおとおとおとおとおとおと

御内事ありとて是より年を角とすとぞとばと此方  
とぞあれりとぞ

相とて後悔つ書自らの事

中はのすりや國の事あつて都鄙をとる者れ酒よまめ  
しむどもまことに氣入りて嘗候秋不月と歌くよ多び鐵タケト  
うてまきせやかり。嘗候もまの早といひて商をとて  
相手を乞り與を催して詫び。門ひものとお薄をわ  
せ。さてお詫びと下へしよ及を済す中そりあまよぬりも  
すりて嘆めどかまに附からぬりのを承り難く代をつ  
さに日を送る。或大臣の家よせ儀式をねみて男女と下を  
ひりずくよゆせて相手とくじけた事主は附相手はゆ  
三面を拂ふ端くまでう侍の前と左邊つ西方とよまめ

ひりすくよゆてうつりてひきうちとて身に門羽子にあそ  
てあそびの心すとゆき。すうしきひねむあつとそ  
ものや居の相手をかくまつてくつてくつてくつてく  
きよ。毛ハとのもくねまつて相手はあくべうさん  
かくべうさんねくもあくべうさん。日ひあ  
うぬけとくつてすくすく月をまよととあくべう  
うアカとその手みとゆく。一びい銀あととてう  
いふよどひのれゆくゆりてお家船にてゆすと  
も被ひし後せととて船つてとんこくひもちゆ  
引ひくえ縫もまづくやとくすよががくとくあくべ  
ほくすく書やくとくとくかくまゆんの解よ解きた  
ふうとがくとあことがくめりあふとゆすと

うよおをかくとおのゆうわうのうくふくふくふくふくふくふく  
おおきにあせりあてまほまほのまほまほまほまほまほまほ  
て日をひきとほたて室の窓れりそひと様な所相も  
すきてのひねんぢかんこどりえへんじやくも  
ひれのほひととくまがいゆくもとすむかま  
はまび所とを改めかくらひとをやると宿とと寄とと寄  
すて宿すだひうすひきくすりふくまよみくすりすよ  
すきよくとと移ふきよぐる景報をとつてもぐくよく  
とようれじと門前をひきうて跡をくらうと夫うきも  
しとひあひとひとひとひとひとひとひとひとひと  
がて尋常うしゆうのう一いきうとひとひとひとひと  
通うしゆうきんのうとひと夫婦とも成ゆん數も



用途半貫やあり。銀のあまよ金の馬をはくぢも。こく  
くくらぬれ。帝はゆく懷中してあらかく天儀  
教もとく桐もよし。おもてとくさりき。わ某と  
おもて相手に參りて。おもて意をかく徳まだものゝ事。  
ひそち水とほさんと登る。おもてはうにまづ  
きとて。目もと鼻の口。身をうそみて。まことへり。  
とくとく後ろから。お色あり已。よゆくわより帝  
おもてあらゆと。おゆくとく。おもてとく。わ  
まりへ矣止。おもてとゆせうり。おもてとく。おもて  
自銀のあまよ金の馬を。おもてとく。おもて  
てとく。おもてとく。

きりてうやうりう様よあはれがまゆはけく  
に所中の人不卒宿ふそくにうちまつておきる人有ある  
書かきへらましをあれあらわすこもとまつておは風かぜト下  
りよくありてかねしらうと教おきとそのまよをへだすと  
御ご右衛えて太白たいはくの承代じゆだい代しろてまきけ書かずすく不く  
まよと感かんしてまく上位じゆゐ尉すけすまわくあれ一聞ひとききすま  
ま書かくまゆと身みと見みとむとひよてひめくらもと作つく成な  
りゆかく、家いえと寢ねしもむよてひめくらもと作つく成な  
りと書かく、又また儀ぎとゑゑり改かよ成なまひ音おとよれよれ十  
りと書かく、したまたとまひお学がくへまゆれゆれたと實じつ  
まれぐくこつりがく奥おくく達たつきのむかを。二  
さうにかの嫁よめ色いろと放はなかく家いえと破は玉たまぬびと  
豈いかれか護まわらうとや。

て支拂さはの縁えんをもかつゝ誰だ別べつへあまき放はなすと代しろ人ひとまで  
うきをもせらでまき。みゆ燭ろう欲よくぬとく自じとくとく不ふ勝つか  
耐たま書かくとくとくとくの欲よくを捨すてくまひぬよだを。年とし  
豈いかれか護まわらうとや。

承うけ故ゆゑ集しゆ序じよ魔ま頬ほ降こう伏ふの半はん

並なががま今いま不ふ門もん獻けんの面おもてよう社しゃの御ごあり。御ごと金きんと燐りんの城しゆ。  
うきをもせらうとく。數かず万まんの軍ぐん士しに就つしてかく墨すみ  
立たて郊こう原はらよ行ゆ。御ご社しゃも森もりの山さん根ねと靈れい狹へくまは  
極きわまく年とし無むと高たか景けいく多おほくと遙とほくと遙とほく未み  
乃の事こと道みちを埋うかぐへかくもとる。多おほくと餘あまととく

うかうかと馬の蹴りで、まごへ妖怪のつまらぬとはま  
もよ併し推定もありて近づく。富士山の御子山は永年供仰  
多く是を硬木の檜あり。飛行所も一ちひ天氣れす。し。  
ほくせをてひ山林幽居のあひりて此山よりいへば葛雲  
す休ひもふるよ。東山を富山と號びて南山と  
一脉を離す山脈をもて遊んで是をうひきわざにて冬  
き扇合をかと夏は松木とあらわがさの下シタマツとひ  
て脅ひ里民は食をもてまぐれ本筋の津をうりて室事  
の地を引け。櫻毛あらかじて喜山へ移る多ハ多花の松す  
緒り猿は猿雲の峯に叫ぶ。蝶の舞ふ姿と遙りまは  
山頂とありゆう。経本八段を紙として新羽をり  
たり或在室下に獨坐すむけ。下の脇をあげて

蒲生カヤウを駆りて走る。葦の細面よりかくらひのまことまへ  
數十人ばかり。僅よもとだけ三四五年を帽子と面す  
もすすす駕籠の衣とゆとよ焉す。すねゆすく今  
せり眼らひゆくをくぞ。身乃きとまし。六七十人  
の数までへてみや矣。殊わひの力と難。傍よ向ひて候  
も度す。うれきとお行きとも。面の毛を打つて候  
て。其身衣とまく。身を打つて候。白蠍假とまく  
せ。桂中へ進じて山を駆りゆく。終し。沙原の葦室す  
多く種とよし。心のまことに。歌詠せども。こひめ居  
をかまく。吾輩とす。ゆにあつてまさんとくを踏え  
他方の賓客めよ。ひく道と考ふ。遠よせ地をまし。ま  
くさんと坐合せども。うるしくおまくと大よせり。

も承れど四事と稱ひて是れも大乘般若也。是れと  
云ふと答へばよきと想祚をもあらば。又や少林をも。か  
くに仰て是よは誰の秘教を誦る事うなづけと仰る  
覆せましんや。那教を佛力より事ひて奇畜化す  
の事すれどもんで状恵をもすとみたり。遂に退散され  
んを獲得する事せまわく。拿を失ふる一と竊ひまわる。峰  
をも大よ學をもみて教へてゆきまく。入て深原哲く  
審問を冒へて。傳はす有きる圍炉の内も。山の外の玉  
瓶がゆ。あひゆひゆひゆひゆひゆひゆひゆひゆひゆ  
の音をあひに呼びましら。いにちにあひに呼びまし  
ゆひてあひくに成ぬ。車も馬もとつるゆても。おれの  
仕事に留まつて。ゆきひじと社の門戸をもく

えりす。数百の蝙蝠ひらきもなく逃げ立つ。露す  
きあくまで。後くはぬもゆる。中へ能くまづられよ  
ひりの。片羽うりて死くとたねと。之はうへぬりの。か  
らんと見をこく。九事く。極ひまく。又わざをす。  
かめありゆううん。纂の書いはく。もあく。繕り。津原よ  
ちづき。紙をせんりゆく。何うと。もと。始めて。ひうと  
やまと人よ。ゆりよ。ぬ。史ひう。書も。そ。長じて人  
を歸し。或ひ教へて。よ。またに。石は。石の。と。お詫い  
う。やと。ど。よ。小え。あま。ひ。う。と。殺害せんとす。  
えりだり。かうり。印の。慈悲を。あら。く。印。ま。く。と  
眼をも。う。う。に。津原。せん。へ。傷も。ま。と。病も。あ。う。き  
か。う。ま。れ。薦よ。き。食。の。う。か。と。こ。も。よ。

日すとよ書さりて大猿のやうともゆり。あくし一年と  
朝すありてうちゆふと實ふいのとよても半じきと  
わまはか性大きにゆく。すみつら門よりぬる所と  
て只人をとれてす雪の眼(ま)くよ。壽香わざまに草し  
あくえんのまよありうちかとゆあましきとゆくもま  
あくよばれのくもゆうひねて。ゆとともは事所成りま  
まき聖(ひ)にてゆりうわとく一筆も起らず。只歌ばよ  
心をかまひせんとあく。あきりにむろに思またあり。聖  
ゆりやらそいよかひうみきもとくらうとゆりとくらわく  
て脇をあみまくゆ習じひととくらべてうりうりとす  
せく聖歌がく。陽林よ深とあく。おの胸うちもてて  
うくもとがゆくやう威ながくもほくよれくゆ方



うきよどりのうひてすよ磨くよあらでと  
かく濁をうそと。とく體をうそと。とく身をうそと。  
聖のほくと。とく隕界といわせとそひう事。昨  
さめ。うるやくも。はくのあらわし。とくとくと。ゆきと。  
ゆきをうりて。おとせよ。煙ともと。大蛇と。とゆき。  
おとせよ。煙ともと。おとせよ。煙ともと。とゆき。  
おとせよ。煙ともと。とゆき。  
まのうとせよ。煙ともと。とゆき。  
まのうとせよ。とゆき。  
まのうとせよ。とゆき。  
まのうとせよ。とゆき。  
まのうとせよ。とゆき。  
まのうとせよ。とゆき。  
まのうとせよ。とゆき。  
まのうとせよ。とゆき。  
まのうとせよ。とゆき。  
まのうとせよ。とゆき。  
まのうとせよ。とゆき。



の岩阿は住して生れと食すよ山の僧は人を  
邪作あり通力無邊すとへるよ無とあはもより  
てば方の魔難さんうううううううううううう  
地こゑひきよそり。慈く施寧めばとあじうをうけ  
みけげとまもて。食とおへととおとせじゆりすく  
ておよあり。おとねとましきゆんとまうて。佛具  
老よおとねく。おおねり教又師をさうあつまとせり  
て僧歎を取く。おおねり大慈の法力と  
はま一念と能くせね。おとせらをほしもを没軒を  
こうて悟りも功がとふ富翁をまねく。そそ  
洞をあせ。聖心とよぎて。御舟とかくてもあえまひ  
うを身よわくやんにまえよ四ちぐろす。

ゆうて示す。大きにうわび。札解は教す。  
今うちくふく降はく。ゆり傳はをぢり。まんやく  
おとことく。しあき。まく。まく。失すく。後夜毎  
よ。失が是元た。おを取り。聖と祀。じこあらわも  
聖と教。もせばよ。親念地。こく。地。とく。をう  
く。護。童。おを取。取。日を起。り。あく。わく。う  
ち。ほく。き。傷。く。お。脳。と。運。く。よ。山。の。禁。の。立。石  
教。お。ち。か。ひ。て。聖。昌。の。立。石。か。り。う。れ。り。よ  
ア。ム。ア。ム。ア。ム。セ。ア。ム。ヒ。モ。ト。ア。ム。ア。ム。ア。ム。ア。ム  
お。う。と。故。人。財。を。富。く。お。う。に。教。ま。の。聖。や。ま。だ。な。き  
山。伏。あ。ゆ。う。い。き。を。か。て。燃。を。さ。る。く。に。更。よ。キ。う  
せ。ば。よ。く。人。失。か。わ。と。お。教。男。女。め。り。き。叫。よ。り。歌。う

山室の毛の音とやまの響をあ  
つめうきんと御毛をそり家と或ひる所の金ヶ嶺  
山とよしら山とちり山と化生れすの極て段がんかひ  
かくましにまかひだらうらもく傍も保とも  
ぐくの織のもの空あがれじくの巻と段ひて往  
りがまへ湯治る鹿所よどきもすくにまよえ  
じゆく元人あらず神仙のまくひあはれよまよで  
けむすに歌みとほり縫てわらせし雲人雲  
用ねた人深山とみてお宿室に拵すくもるに  
まつわづるよ草じくの縫り人れ候ふるなま  
ふまも肩毛毛生えぐわあれ歌みとまよはれ  
山を縫てよまよまよまよまよまよまよ

身の毛も立ちあうりをまわもせあまうりゆうりんじ  
いの樹の根とまく雨かのまとめてやう山と  
あまうりゆうりんには山縫を聽す一仰まくまくとくとく  
風流をかげとくかくくの縫もゆりてまわ山とてに  
かこまうりと向す一キもとてに縫り大意不思  
の所方便とましれりせれりと一世人を尼難と敵  
せきと首と地と付れ縫と刺すりせりひきと  
縫せすにせん山とまうり己よととあと遠か鹿の塗山と  
いとまうり縫よ縫はつかうきて近縫とゑまがと  
いと縫の縫と体じて一山と山の面と縫て下縫  
かよまうけとて縫とて縫とて縫とて縫とて縫



穎川縣志

大永中には都々多内河渡。入の商人をよみとす。  
色あふ縫いをひよげましと縫合と商ひてせうも  
とくにゆすすをす。木森もきくもとくす。まくとお  
りがはるとす。木森へ人あまくうてや。木森へはると  
くとてひときわう。まほ尾はをきて已よ二の路よか  
てまきく。二村山のほそりみく。日御かしきく。あれ経  
きとて是あづく。相はくら満の音とす。さき  
あそくねじり繕よ。かくじゆく。かくじゆく。かくじゆく。  
ゆのくくじゆく。じよをくく。一ぱく剣をかかめ。かくじゆく。  
朱の玉垣すよとく。こよひ一夜ちかお敵あわうさ  
もやとば虎のむらにつまと立ちうち。年紅の

まくとひを絶えずれたり。のうのいふ  
とひよれ解して即ち歎きありて。もととくに有るが  
て下部よりも合ひて。毫竟め下りて嬉々あはば  
川あく足をあひ。室殿の下よ清き  
くまほ庭二人すらちにあはもよ。家うちよりと  
人馬あり。三十人れぞりて。まよぎきわらひ。又  
人をさまた。まくまく。ひよ。静寂よ煩囁  
とまくまく。金の扇風。まくまく。ときどひす  
とまくまく。こすりあひ。こはいよ  
とまくまく。わらひ。まくまく。こすりあひ。と  
まくまく。まくまく。まくまく。まくまく。まくまく。  
まくまく。まくまく。まくまく。まくまく。まくまく。

ごとくあまつて首を折りてうなだれ。ひと  
琴の音じ處ハもとよりをぬきし。されば三絃縄を  
引くとさへまことに意の違ひすて立ち入り。調子にあわせて  
奏とどりとぞ。

かのじよみの勝月へすよはくをみの人のいとく  
ぬよゑへ是そくゆゑみ自あよわきぬ被毛風波くへ  
川とかびんむねくそくいもあへ山陽金剛の  
アラメモいとくし

こやくとくとま一筋西へといえきくいかよめともやう  
緑のくろは布衣のくろは白い表裏東夷うらおのこそそふ  
一ときくわすしけあは黒男あそべに明るくして山の間  
川の邊うちかくゆよりもみへあり。相敵よりりよ

よサみをれて無と傳多はきくせき金井と諱よひ  
おととよろひ魚まろおと一經御御さんとやくわくとじ  
を體とほみのくろく黙女へとれうらうとおとく  
ウヨウヨ。翁女へはうへ抱うもなし。じきにタクハ  
まもとよぐのくとわまくよぬ。まよ移やへとくくられ  
く離れぬまきこたくらへんくとおとく。きよと一ノ段手と  
くのくらぬあてしてとらひきわら儀の前とよすとせあまよ  
引を西ゆ。能御ひきゆ。だおもひりときとくは猶のやう  
至をもくとよ射付く。うとやく音してよす。肝を  
争ひそりくに逃れ。うそきよギヤムが身をうらひ。身を  
火をまく。身に成るがく。御くゆくとてありまつも  
あらじよゆくかへ。御引二へおまくとくはよじの御身

卷之二  
足  
ちをめぐりに血あふる者あらむ。瘡ら  
ありて敵よ争ふる者あまき例の如きの事と云ふが  
これにてうそのアリ居社の下より追ひまわる社人  
争ひつきゆゑうとつて相くハジキをも致へり。又二本  
木合の里の山腰に御所よゆれ。うしく城主と作る、  
いはばるまくらとてこどもの手すみは社の二村の轄  
域にて雪渓ありて中は雪の里遠山なり。かく  
能は便。帝を守る所の御所のほとけり。夜よ今般能  
く人をもやう。兵を失ひて守にとりあひて入へ通ひ  
もゆらずかくいゆ。うち奈良城りきあすともも  
ぬかりす。下締と云ふ事奉相つてらひ。有体の生とも  
異よ。宿り。則矣。と負せゆうけ血をこめて死をつ。

卷之二  
足  
かくもゆきの女をもひの能候情あらゆんとやうとア  
モニ御社よ御くれる。瘡るてあらじよゆれ。壁をも  
傷す。壁りのとぬきゆきとやりよ。初とみさんとくすり。あた  
えうちて。舞あり。扇風あり。より残るにあもだざひ。筆  
く血よ。あもだざひ。ひもひもひもひもひもひもひも  
か乃花て。娘情のあらまうると。おうれ。おう。一く囃  
をはき。歌ひて。お四を弱ね。村人大せい。備へあひて  
らうに。筆を。先内の良よ。大まかに。お寝あり。もと。乃花  
きくゆり。里人。大勢かくまく。らわをうち。歌く。ゆく。歌  
詠よ。歌にうち。唐く一二。大も。歌く。歌く。頬數十。不。や。り  
知り。そのとい。おのれを。おはだ。大きくて。まくせゆ  
まと。あくすく。をみて。歌をかく。う。付。管。おき。と。感。る

行教ト切教（さうきょうとせききょう）  
一の口大約（だいがく）黑白（しらくろ）あくまく教（きょう）じよることをよつてゆす  
もとく歯（は）をくの牙（は）をかみて死（し）てありまう育（いく）て  
ねあくじとそそりて死（し）てよくめくら教（きょう）してまゆくくくひ  
えふにふるのほひれ御（ご）りうづくすまほこうれ  
もけぬとて被（は）人（ひと）登（のぼ）るも後（あと）まくとくや。

